

グリーン四国

No.1275
2026年
6月号

ノウサギ研究の成果を発信 ～「ノウサギ研究アーカイブ」の公開～

【詳細は2頁】



四国の山写真・動画コンテスト
「四国の山々の風景」部門
森の妖精

目次

ノウサギ研究の成果を発信 —「ノウサギ研究アーカイブ」の公開—	2
固有種トキワバイカツツジの開花状況調査	4
「育てるけん 伊予の国から 緑の宝」～第76回全国植樹祭えひめ2026～等の開催	5
森の巨人たち百選現状調査	6
仁淀川町の林業への取組と池川木材工業の会社見学から学んだこと	7
「梶原町 太郎川公園森林フェスティバル」開催	8
かわらっこ村まつり2026に「かんたん木工教室」を出展	9
南予森林アカデミー研修生、自然再生の取組について学ぶ	10
スギ花粉とヒノキ花粉	12



四国山の日

四国森林管理局

高知市丸ノ内1丁目3-30
TEL 088-821-2052
HP <https://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/>
E-mail shikoku_soumu@maff.go.jp

ノウサギ研究の成果を発信 — 「ノウサギ研究アーカイブ」の公開—

〈森林技術・支援センター〉

当局森林技術・支援センターでは、平成29年度からノウサギによる森林被害、とりわけ苗木被害に着目した研究を継続して実施してきました。

これまでの取組により、小型箱ワナの独自開発、小型箱ワナを用いた誘因捕獲手法の確立（誘引エサの検証）、GPS首輪及びセンサーカメラによる行動分析、防護ネット被害のメカニズム解明など、数多くの興味深い知見やデータ、動画、観察結果が蓄積されています。

これらの研究成果は、ノウサギの行動特性や被害発生の実態を具体的に明らかにするものであり、現場における被害対策の高度化に資する実践的な内容となっています。特に、ノウサギの苗木被害に焦点を当てた研究は全国的にも事例が少なく、本取組は当局独自の特色ある研究として位置付けられるとともに、民有林においても有効に活用できる知見を提供するものです。

今回、これらの成果を「ノウサギ研究アーカイブ」としてウェブページに取りまとめ、広く発信し、

職員等が研究内容の概要を理解し、現場での実践や民有林へのPRに活用できるよう、研修動画やチラシの整備を行いました。

今後は、管内各県や森林組合、林業事業者への情報提供を行うとともに、各種会議等におけるチラシ配布などのPR活動を展開し、さらに林野庁SNSへの掲載も依頼するなど、積極的な情報発信を図っていく予定です。

森林技術・支援センターは、引き続き、深刻化する獣害への対策を含む現場に根ざした研究成果の普及を通じて、森林被害の軽減と持続可能な森林管理の推進に貢献してまいります。



ノウサギ研究アーカイブ

四国森林管理局



ノウサギ研究アーカイブを公開

四国森林管理局では、ノウサギによる苗木被害の低減を目的として、行動調査や防護技術の検証に取り組んできました。

これらの研究成果を分かりやすく整理した「ノウサギ研究アーカイブ」を、四国森林管理局ウェブサイト上で公開しました。

現場で活用できる実践的な知見を、動画・写真・図解を交えて紹介しています。



01

森林技術・支援センター



動画公開

unique!

小型箱ワナ誘引捕獲

- ・小型箱ワナを独自開発
- ・ニンジンでは誘引できない
- ・箱ワナ設置動画をリリース



7分間の動画で解説!

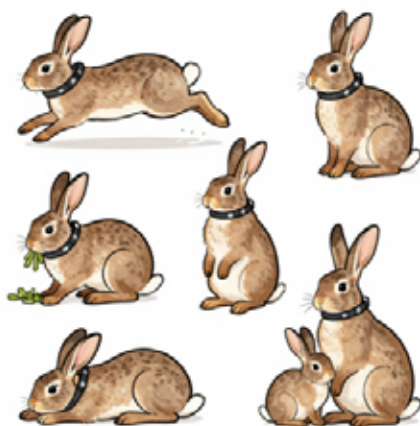
Click ▶

02

森林技術・支援センター

何処に住んで

GPS首輪とセンサーカメラから



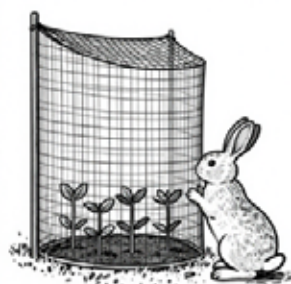
何処に出没するのか

ノウサギ行動特性を分析

Click ▶

03

森林技術・支援センター



防護ネット被害発生のメカニズムを解明

センサーカメラが、ノウサギの防護ネット被害の瞬間を撮影!

Click ▶

四国森林管理局 森林技術・支援センター

Email:shikoku_gijyutu@maff.go.jp

固有種トキワバイカツツジの 開花状況調査

〈局計画課・技術普及課〉
〈四万十川森林ふれあい推進センター〉

トキワバイカツツジは、愛媛県南部にのみ自生する固有種であり、また、5月に開催された「全国植樹祭えひめ2026」において皇后陛下のお手植えの樹種にも選ばれたツツジ科の常緑低木です。四万十川森林ふれあい推進センターでは、このトキワバイカツツジの開花状況調査を平成29年から毎年行っており、調査開始時に設定した20本の固定木について、満開日を予測して調査日を設定し、開花数・生長量等を記録しています。

満開日を正確に予測するため、3月下旬から事前調査を毎週実施しました。宇和島市の2月以降の積算温度について過去3年間のデータを参考にしながら、事前調査で蕾の大きさや色付き具合の変化などを観察し、今年は開花時期が一週間程度早めと判断して、調査日を4月24日に設定しました。

調査は四国森林管理局計画課と技術普及課との合同により、総勢11名で3班に別れて行いました。例年のことですが、満開を迎えた群生箇所では、林道の法面一帯が、淡い紫色やピンク色に染まり、そ

の希少で可憐な存在感を放っていました。

調査当日には、比較的日当たりの良い箇所ではほぼ満開を迎えていましたが、日当たりの悪い箇所ではまだ緑色の蕾が多数付いた状態だったことから、自生箇所の光環境によって開花状況に大きな違いがあることが確認できました。また、個体によっては全体の上部にのみ花が付いているものや、一部の枝のみ沢山の花が付くものがありました。さらに、殆どの花色は薄紅紫色でしたが、ほぼ白色の花が占める珍しい個体もありました。

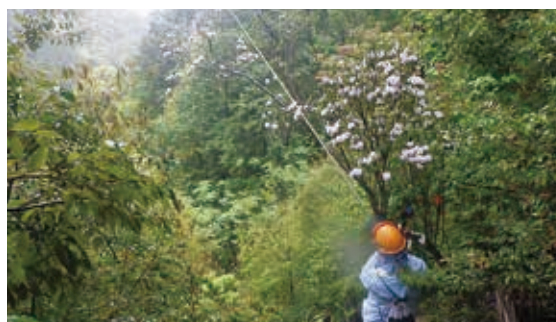
このように、自生している標高や土壌、斜面の向きといった条件は同じであっても、光環境や個体差によって満開度や花の付き方、花の色に違いがあることが確認できました。

また、この周辺ではニホンジカによる食害が続いており、当センターでは、平成24年度からシカ剥皮被害防止ネット（単木保護用ラス巻き）でトキワバイカツツジを単木保護するとともに、定期的な巡視を行い生育状況等を注視しています。

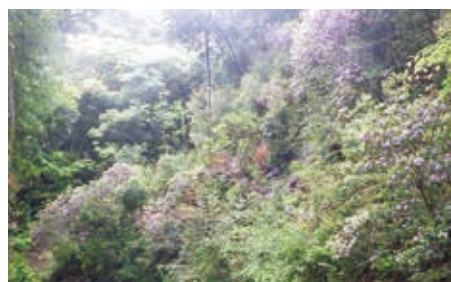
後日調査結果を集計したところ、例年よりやや花（蕾）の数が少ない結果でした。今後も、関係者や愛媛森林管理署と連携し、希少種であるトキワバイカツツジの生育環境を維持・保全できるよう、継続的な調査や巡視を実施していきます。



調査方法等打合せ



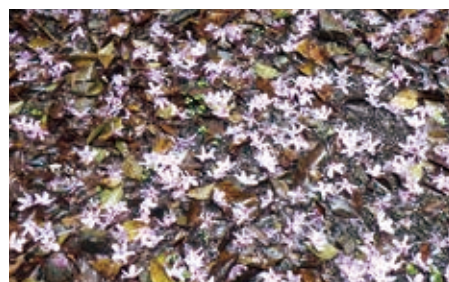
開花数、樹高等を調査



林道沿いの群落



花は淡いピンク色が多い



落下した花びらも美しい

「育てるけん 伊予の国から 緑の宝」 ～第76回全国植樹祭えひめ2026～等の開催

〈愛媛森林管理署〉

森林整備や木材利用への理解を深める第76回全国植樹祭（(公社)国土緑化推進機構、愛媛県主催）が5月17日、愛媛県総合運動公園において、天皇、皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、雲一つない晴天の下、全国から4,500人が参加して盛大に開催されました。

農林水産省からは、鈴木大臣をはじめ小坂林野庁長官、齋藤森林整備部長ほか、四国局からは田中局長、近藤森林整備部長、宮崎技術普及課長、当署からは山口署長ほか、おもてなし広場の展示ブースに署員3名が参加しました。

式典では、天皇陛下から「人々が森林への愛情を育み大切に守り育て、健全な森づくりに向けた活動の輪が愛媛の地から全国、未来へと大きく広がっていくことを願う」とのおことばがあり、中村県知事から「県民一人一人が森林・林業に対する理解を深め、豊かな森林を健全な姿で次世代に引き継いでいく」との挨拶が述べられました。

続いて、天皇陛下が無花粉スギ、クスノキ、クヌギ、皇后陛下が少花粉ヒノキ、タチバナ、トキワバイカツツジをお手植えされ、また、天皇陛下がクロマツ、ツブラジイ、皇后陛下がヤブツバキとイロハモミジの種をお手播きされました。トキワバイカツツジは宇和島市にのみ自生する希少樹種（国有種）で、一部は国有林にもあり、局署において保全活動を実施しています。

のたてじよ

両陛下がお座りになられたお野立所やステージには、大阪・関西万博の「大屋根リング」に使われたCLT（直交集成板）が再利用されたところですが、西条市の（株）サイプレス・スナダヤが建築資材の提供を行いました。また、多くの県民が大会を身近に感じていただくため、県内5か所（今治市、松山市、伊予市、鬼北町、松野町）にサテライト会場が設置され、式典映像の中継やワークショップ、各種ブースが出展されました。

愛媛署は、おもてなし広場の展示ブースに石鎚山の四季折々の花木の写真、森林の働きを紹介するパネルの展示に加え、管内国有林を紹介するクリアファイルや、自然休養林等を紹介するパンフレットを並べ、多くの来場者に見ていただき、国有林や森林・林業への理解を深めていただきました。



展示ブースの様子

愛媛県では60年ぶりの全国植樹祭であり、小坂長官には前回の植樹会場にも足を運んでいただいたところですが、県担当者からの説明を熱心に聞かれています。



長官の視察の様子



また、前日16日早朝には、愛媛署と森林整備事業（保育間伐）で請負契約を締結している（株）いぶき（久万高原町）と長官等との意見交換が行われ、会社を離れ独立した者が、国有林の安全活動や指導により、ケガなどが少なく地元で評判になっていること、安定した収益を上げているなどの話があり、国有林の事業推進が地域林業に一役買っているということを確認することができました。



意見交換の様子

森の巨人たち百選現状調査

〈高知中部森林管理署〉

4月8日、さおりが原（蓮花野35林班へ1小班）にある「森の巨人たち百選」に選ばれているイヌザクラとトチノキの現状調査を行いました。

「森の巨人たち百選」とは、林野庁が2000年、次世代に引き継ぐ貴重な財産として、日本全国の国有林の中から胸高直径1メートル以上の木や地域のシンボルとなっている木を候補に選び、その中から特に優れた100本を選定したものです。

四国森林管理局管内には7本があり、そのうち当署管内では

- ・No.78 さおりが原の巨人たちイヌザクラ（樹高30m・幹周517cm）
- ・No.79 さおりが原の巨人たちトチノキ（樹高25m・幹周479cm）

の2本が選ばれています。



イヌザクラ



トチノキ

さおりが原は三嶺への登山ルート上にある標高1170メートルの平らな緑の空間が広がる原生林です。1970年代に高知大学ワンダーフォーゲル部が、当時の人気歌手・南沙織にちなんで名付けられたというエピソードもあり、東屋やトイレも整備されており、訪れる人が静かに森の時間を楽しめる、貴重な場所となっています。

一方で、この地域はニホンジカによる被害が深刻です。民間ボランティアや地元の小学校、高知大学などの協力により、防護ネットの設置など森林保護の取組が行われています。約30年前までは、笹や多様な植物が生い茂り、小川が流れる美しい森でしたが、現在は食害の影響でその面影はほとんどありません。林床には、シカが食べないバイケイソウやシコクブシ（トリカブト）などがわずかに残るの

みとなっています。それでも、ミズメやブナ、モミ、ツガなどの樹木が混在し、野鳥のさえずりが響く穏やかな森であることに変わりはありません。



さおりが原(左) さおりが原(東屋)(右)

以前からイヌザクラには一部に枯れが見られていたため、生育状況と健全性を正確に把握する目的で、落葉期と新緑期の2回に分けて調査を行うこととしました。今回はその1回目として、若手職員のOJTも兼ねて大径木調査を実施しました。（※令和5年度末時点で、「森の巨人たち百選」のうち12本が枯死や風倒等により現存していません。）

新規採用職員1名にとっては初めての現場であり、他の職員にとっても大径木調査は初めて経験することが多くありました。ベテラン職員の指導の下、「届かん、そっち持って」と声を掛け合いながら、3人がかりで幹周や樹高の測定を行いました。



測定中の様子

調査の結果、イヌザクラは幹の一部が枯損していましたが、全体としては依然として力強く堂々とした姿を保っていました。一方、トチノキは推定樹齢約300年ですが、前回調査から幹周が10cmも増加しており、その旺盛な生命力を感じることができました。

これら「森の巨人たち」をはじめ、この森に生育する多くの大木は、何百年という長い年月をこの地で生き続けてきました。その樹皮や枝ぶりからは、厳しい自然環境に耐えてきた歴史を感じることができます。

当署では今後も、「森の巨人たち」の保全をはじめ、管内の森林保全管理に引き続き取り組み、かけがえのない自然を守り育てていきたいと考えています。

仁淀川町の林業への取組と 池川木材工業の会社見学から学んだこと

〈嶺北森林管理署〉

5月22日、高知県仁淀川町にある池川木材工業(有)の会社見学到、四国森林管理局職員と嶺北森林管理署の若手職員8名を含む計17名で参加しました。



仁淀川町農林課説明の様子

見学に先立ち、仁淀川町農林課の奥田課長より、町の概要や林業への取組について説明を受けました。仁淀川町は森林率が約89%と高く、戦後の造林により人工林率も約74%に達しているなど、成熟した森林資源を有している地域であることが分かりました。

また、個人林家による施業が多いという地域特性を踏まえ、搬出間伐や作業道開設、運材への支援が行われており、林業生産を維持するための基盤づくりが進められていました。さらに、仁淀川町林業振興センターを基点として、森林情報の集約や施業調整、原木生産から流通までを一体的にマネジメントする体制が構築されており、分散しがちな森林所有・経営を地域単位で束ねることで、安定的な木材供給と効率的な流通の両立を図っている点が特に印象に残りました。これらの取組は、単なる支援にとどまらず、地域全体で林業の持続性と収益性を高める仕組みとして機能していると感じました。

続いて、池川木材工業(有)の大原代表取締役より、会社の概要について説明を受けました。同社は、端材を活用した下駄づくりから始まり、現在では原木の調達から製材、加工、販売までを一貫して行っているとのことでした。

また、「仁淀川町の山を活かす」という考えの下、地域材の活用やブランド化、海外展開、木質バイオマスの利用など、多角的に事業を展開している

点が印象的でした。特にヒノキのすのこは国内シェアの半数以上を占めているほか、海外展開においては土佐ヒノキを「Konoki」とブランド化し、地域資源に付加価値を持たせながら需要を拡大している好例であると感じました。

工場見学では、3Dスキャナーを活用した製材工程や自動化された仕分け作業など、効率的な生産体制を間近で見ることができました。また、製材時に発生する木屑や樹皮をバイオマス燃料やペレットとして活用するなど、資源を無駄なく循環させる仕組みが構築されており、環境配慮と収益性の両立を図っている点が印象的でした。

私たちは普段、国有林の管理や保全といった「川上」の業務に携わっていますが、今回の見学を通じて、「川中」「川下」における加工・流通の実態を具体的に理解することができました。特に、安定した原木供給や品質確保が、川下の事業展開や市場評価に直結していることを改めて認識しました。

今後は、森林を育成・管理する立場として、こうした川中・川下のニーズも意識しながら、林業の成長産業化に資する取組につなげていきたいと感じました。



加工状況説明
(ギャングリッパー)



加工状況説明
(反転機)



加工状況説明
(パーク集積場)

「梶原町 太郎川公園森林フェスティバル」開催

〈四万十森林管理署〉

5月24日、梶原令和の森林づくり協議会 ReMORI（りもり）が主催する太郎川公園森林フェスティバルが開催されました。「もう一度、一緒に森林に入ろう」をテーマに来場者に森林の文化に触れてもらうこと、林業関係で働く若者の活躍の場とすることを目的としています。

当日は少雨の中での開催となりましたが、町内外からスタンプラリーや木登り体験会、物作りワークショップなど多種多様なアクティビティや梶原町に縁のあるフードスペースが展覧され、来場者を楽しませました。

今回は目玉アクティビティとして、昨年新たに太郎川公園にオープンした巨大なネットアスレチック「FUNMOCK（ファンモック）」があり、満員の大盛況を見せていました。

また、昨年に引き続きチェーンソーアート世界チャンピオン「城所ケイジ」さんによるライブパフォーマンスでの彫刻製作が行われ、一本の丸太から馬などを削り出す圧巻のパフォーマンスが披露されました。



チェーンソーにより丸太が馬の像になっていく

四万十森林管理署からは、署長から若手職員まで幅広く10名が参加し「木製キーホルダー作り」を出展しました。あらかじめ下絵が書かれた木製の

板に、ペンや色鉛筆で思い思いに色を塗り、自分の選んだストラップを付けて自分だけのキーホルダーを作るものです。



キーホルダーを選ぶ「どれにしようかな」



真剣な眼差しで色を塗る子どもたち

当署のブースにも、小さいお子さん連れのご家族をはじめ100名を超える方々が訪れ、時に真剣に、時に賑やかに思い思いの色を塗ってキーホルダー作りに取り組んでいました。完成後には笑顔やお礼の声をいただき、職員の今までの準備が喜びに変わる瞬間となりました。

これからも森林とのふれあいを広げるイベントに積極的に参加し、森林の魅力を発信する活動に取り組んでいきたいと考えています。



かわらっこ村まつり 2026 に「かんたん木工教室」を出展

〈四万十川森林ふれあい推進センター〉

○概要

5月24日、四万十川の岸边にある四万十市田出ノ川のカヌー体験施設「かわらっこ」で、交流体験イベント「かわらっこ村まつり」が開催されました。

本イベントは「かわらっこ」が主催し、四万十市が後援しています。当センターはお声がけをいただき、今回初めて「かんたん木工教室」のブースを出展しました。

○かんたん木工教室

当センターのブース（かわらっこ内ホール）では、四万十川源流域の自然木を使った木工体験を行いました。



ブースの様子

使用した木材は、黒尊山国有林のミズメ・ヤマザクラ・ヒメシャラ、^{いらずやま}不入山国有林のクロモジなどで、

- 自然木の鉛筆作り
- 木のキーホルダー「木いホルダー（通称モックン）」作りを体験していただきました。

まず、来場した親子に対し、森林環境教育教材として

- 絵本（「もくざいのヒミツ」「雨水のぼうけん」）
- 森林の働きや葉っぱを紹介したクリアファイルを配布し、「親子で読んでください」とご案内しました。その後、木工体験の手順と注意事項を説明しました。

鉛筆作りでは、工程に応じて次の3種類を用意しました。

- ①芯が入っていて削るだけのもの
- ②ある程度の長さ加工したもの
- ③採取したままの自然木（約50cm）

今回は小さな子どもの参加が多かったため、多くの親子が①又は②を選択しました。

鉛筆削り機では削れないため、センター職員の指導のもと、電動ベルトサンダーを使い、親子で協力して研磨し仕上げました。



親子で木の鉛筆削りの様子



木の鉛筆できたよ

モックン作りでは、ひもを付け、枝や動眼を使って表情をつけた後、木片やビーズ、シールで飾り付けを行いました。

「ここはどうする?」「こうしたらいいかも」など、親子で相談しながら、個性あふれる作品を楽しそうに完成させていました。

○その他のイベント

会場のキャンプサイトでは、さまざまな催しが行われました。

- 中村中学校吹奏楽部によるコンサート
 - 間六口さんのバナナのたたき売りショー
 - よさこい踊りグループ「幡多舞人」の演舞
 - カズダンススクール（黒潮町）のダンス発表
- また、四万十川では、巨大ボード「メガサップ」での約3kmの川下りレースやカヌー体験も実施されました。

会場には地元グルメの屋台も並び、その様子は夕方のローカルニュースでも紹介されました。

○おわりに

参加者からは、次のような声がありました。

保護者「この絵本は知っています。あとで子どもに読み聞かせします。」

子ども「クロモジの香りがよかった。作った木いホルダーをリュックに付けます。ありがとう。」

今回、20組の親子が参加し、イベントを通じて

- 四国森林管理局の役割や事業のPR
 - 木材の魅力や森林の大切さの普及
- を効果的に伝えることができ、大変有意義な一日となりました。

南予森林アカデミー研修生、自然再生の取組について学ぶ

〈四万十川森林ふれあい推進センター〉

○概要

5月25日、南予森林アカデミー研修生を対象に、滑床山自然再生事業の取組についての講習と作業体験研修を実施しました。

この研修は、昨年に引き続き（一社）南予森林管理推進センターから、国有林で取り組んでいる自然再生事業などを題材に現地実習をしたいと依頼があったもので、今年は、研修生6名と同センター職員3名も同行し、当地の現状について理解を深めていただきました。

○はじめに

鹿のコル駐車場において、ふれあい推進センター所長の挨拶の後、配布資料を基に、鬼ヶ城山系の自然環境や植生分布について説明しました。また、三本杭山頂周辺ではシカ食害によりミヤコザサが消滅し、表土の流失から山腹崩壊を招く状況となっていたこと、当時のふれあいセンターが山頂周囲にシカ防護柵を設置したこと、NPO団体やボランティア等の参加協力により移植されたミヤコザサが回復・繁茂し、さらにオンツツジやアセビなどの群落も復活したことを説明しました。

○滑床山国有林での活動紹介

その後、八面山登山口から三本杭へ向けて登山開始し、登山道沿いにある特徴的な樹木について、現地の樹木名板を示しつつ、名前の由来や特性などを詳しく説明しながら山頂を目指しました。

当日は好天に恵まれ絶好の登山日和となり、眼下に広がる造林地や天然林の山々を見下ろすことができ、宇和海の向こうに九州地方の峰々を望みながら歩を進め、滑床山国有林のブナ原生林に到着しました。当地はブナを主体とした広葉樹林分で登山者にも人気ですが、樹木の幹部と根元の樹皮や下層植物がシカ食害を受けて衰退し、林地荒廃に繋がる恐れがある場所です。このため、登山道沿いを主体として、平成18年からシカ防護柵を計17箇所、総延長5,620m設置してきたこと、柵の内側と外側で植物の繁茂状況に違いがみられるなどの効

果があることや、一方でブナやカエデ類の高木が枯れて倒れ、シカ防護柵が損壊し、再び食害の影響を受ける恐れがあるため、定期的な点検が重要であることを説明し理解してもらいました。

さらに、ブナ原生林の中を歩くと、オンツツジの満開時期となっていることもあり時折遭遇する登山者と挨拶を交わしながら、ようやく三本杭山頂へ到着しました。鳥形山など四国カルストを遠望できるほどの好条件だったこともあり、初めて訪れたという研修生は360度の大自然に感銘している様子でした。



三本杭山頂での集合写真

○シカ防護柵の点検作業実習

昼食後は登山道（復路）を下りながらシカ防護柵の点検と補修作業の実習に取り組んでもらいました。点検を開始し、登山道から離れ、シカ防護柵に沿って約50m移動した地点で、以前、枯れたブナの枝が落下した際に支柱が折れており、応急処置していた箇所に着きました。手分けして作業に取り掛かると、堆積した大量の落ち葉や土砂によってネットが埋まっており、掘り出し作業にはやや苦戦しましたが、すぐにコツを掴み、約20分で新しい支柱への付け替えを終え、防護柵の修繕を完了しました。





大量の落ち葉や土砂で埋まったネットの掘り出し



シカ防護網の修繕完了

なお、その後も、シカ防護網に引っ掛かった落枝の除去作業や、控えロープのアンカーの緩み・浮き上がったシャトルアンカーをハンマーで打ち込む作

業を行いました。さらに、遠望からのシカ防護網点検を可能にする試みとして、一部区間の防護網上部に防鳥テープを取り付け、こうした地道な作業が植生を保護し、自然環境の維持や国土保全にもつながる重要な取組であることを理解してもらいました。



試験的に防鳥テープ取り付け

〇おわりに

当所長から、今回の研修生の皆さんに体験していただいた作業についての振り返りが行われるとともに、現地研修の締めとして森林管理推進センター研修教務課長より御礼の挨拶があり、無事終了となりました。

当センターでは、自然再生事業の取組とともに、各小中学校を対象とした森林環境教育や林業関係機関への支援等も引き続き実施してまいります。



スギ花粉とヒノキ花粉

森林総合研究所四国支所 稲垣 善之

春になると多くの方がスギやヒノキの花粉症に悩まされます。スギやヒノキの花粉の量は年によって大きく変動します。花粉症対策として、毎年花粉生産量を予測することが重要です。スギとヒノキは開花前年の夏に花芽を形成します。スギの雄花は夏から秋にかけて成熟したのち冬に気温が下がると休眠状態になります。そして、2月ごろ気温の上昇とともに開花し、花粉が飛散します。スギでは秋に花を簡単に見分けることができます。この性質を利用して目視でスギの着花量を判定し、その結果が翌年の花粉飛散量の予測に活用されています。一方、ヒノキの雄花は秋には小さいままで春になってから成熟し開花します。したがって、ヒノキでは秋の目視での着花量調査は極めて困難であり、翌年の花粉飛散量予測に活用することができません。ヒノキでは、花粉量と前年夏の気象条件の関係から花粉の飛散量を予測する手法が有効です。これまで、スギ花粉とヒノキ花粉の年変動は、おおむね同調すると考えられていましたが、近年では年変動が同調しない事例も報告されています。花粉生産に及ぼす影響を把握する必要がありますがヒノキについての情報は少ないです。

高知市の森林総合研究所四国支所では、構内のスギ、ヒノキ林において花粉生産量を計測しています。林床にリタートラップというかごをおいて、落葉落枝等を集めます。この中から、スギとヒノキの雄花の殻を分別します。雄花の殻は大変小さく分別するのに労力がかかります。雄花殻の重量から花粉を含む雄花全体の重量を推定し、雄花生産量と花粉生産量を算出しました。その結果、スギとヒノキの雄花生産量の年変動は同調していませんでした。スギでは梅雨明け後6週間の

平均気温が高いほど雄花生産量が多く、ヒノキでは、梅雨期6週間の降水量が多いほど雄花生産量が少ない傾向が認められました。つまり、スギでは温度条件が、ヒノキでは水分条件が翌年の花粉生産量に影響を及ぼしており、樹種によって花粉量に影響を及ぼす要因が異なっていました。高知市では梅雨時期の雨が少ない場合は、翌年のヒノキ花粉の生産量が多くなることが予想されますので、ヒノキ花粉症の方は十分にご注意ください。

参考文献

稲垣善之ら(2022)森林総合研究所四国支所年報63:17-22



スギ雄花



ヒノキ雄花